

『革命前夜』

近藤茶

【元にした作品】

無し

【あらすじ】

人生に絶望し、弁護士事務所空き巣に入った男は、銃を作って政治家をうつというテロリスト達の計画を知ってしまう。捕まり、彼らと話す中で、空き巣は自分も何かすべきなのかと考え始める。しかし、彼らの想い、姉弟の繋がりを見つけていく中で、空き巣は彼らの計画を止める決断をし、行動する。

【特記事項】

ほとんどのシーンは弁護士事務所の一室での会話劇。(短く取調室のシーンが一度だけあります)

【本文文字数】

7182文字

【登場人物】

- 1 テロリスト  
2 テロリスト。1の弟  
3 テロリスト。本業は弁護士  
空き巣 出来心で空き巣に入った男

○弁護士事務所・深夜

部屋の中央に空き巣が椅子に縛られている。取り囲むように1・2がいる。1の手には銃が握られている。3、入ってくる。

3 「どういう状況？」

1 「ごめん、本当にごめん。」

3 「いいから。」

1 「ごめん、本当ごめん。大事な日の直前に……。」

3 「いいから。とりあえず落ち着いて、状況説明して。」

2 「明日の段取りもう一回確認しようと思って。そしたら途中で物音がして、見たらこいつがいて逃げようとしてたんで。騒がれて通報されたらマズいと思って、捕まえたんですけど。」

3 「誰こいつ？」

2 「わからないです。空き巣かなんかだと思います。」

1 「聞かれた、かもしれない。聞かれてなくてもこれ（銃）は見られた。」

3 「うん。」

1 「どうしよう。こいつ、どうすればいい？……殺す？」

2 「ちよっと！」

3 「一回落ち着いて。捕まえたんだからとりあえず大丈夫だから。こんな手荒な縛りかたして。（空き巣に）よしよし、怖かったね。」

3、空き巣の口のタオルをはずそうとする、が。

3 「（空き巣に）騒いだら、頭に血のぼってる奴がいるから、何するかわかんないから。騒がないでね。」

空き巣、何度もうなづく。

3、空き巢の口のタオルをはずす。

空き巢「……何も聞いてないです。何も見てないし。」

3 「いや、見てはいるでしょ。すぐばれる嘘ついちゃダメよ。」

空き巢「……見は、しました。」

1 「やっぱ殺そう。」

2 「ダメだって！」

空き巢「でも！ 誰にも言わないです！ 何も見てなかった事にするんで。」

1 「……信用できない。」

空き巢「言わない！ 絶対に言わない！ 言うような友達とかいないし。」

3 「寂しい事言うね。何してたの、こんな夜中に。法律相談でもないでしょ？」

空き巢「……出来心だったんです。金に困ってて。バイト首になって、学歴もねえから全然就職も決まなくて、なんかもう人生詰んでんじゃないかって気持ちになって、それで、もうなんかどうでもよくなって。」

3 「それで、盗みでもやってやろうかと思って、ここ忍び込んだ？」

空き巢「……弁護士って金持ってそうって思ったから。」

3 「なら弁護士になればよかったのね。」

空き巢「なれるわけじゃないでしょ。俺バカなんだから。」

3 「……殺そうか。」

空き巢「ええ！？ なんでそうなるんだよ！」

1、空き巢に銃を向けている。

2 「（1を止めて）ダメだって！（3に）なんでそんな事言うんですか！」

3 「嫌いなんだよね、こういう奴。」

1 「計画を聞かれたなら、生かしておけない。」

2 「だからダメだって！ それは、それは何の意義もない事でしょう？ そんな事するために準備してきたわけじゃない。違いますか？」

3 「……冗談だよ。ごめん。」

1、銃を下ろす。

空き巣 「……なんなんだよ。あんたら。」

3 「知りたい？ テロリストだよ。」

1 「ちよつと！」

3 「銃作って、政治家殺そうとしてんの。そういうの、テロリスっていうでしょ？」

空き巣 「はあ！？」

1 「言っちゃっていいの？」

3 「聞かれたかもしれないんだしいんじやない？」

空き巣 「だから聞いてないですって……。」

3 「でも今聞いちゃったね。さて、こいつどうしようか？」  
間。

空き巣 「……あの、本当に言ってます、テロリストとか。」

1 「……本ただけど。」

空き巣 「いや……いやいや、日本でテロとか。」

3 「無いと思ってるの？」

空き巣 「……銃とか、どこで手に入れるんすか？」

1 「作った。」

空き巣 「作ったって……。」

1 「作れるよ。現に尾上は自分で銃を作った。」

空き巣 「尾上……？」

1 「2022年7月8日奈良市内の駅前で参議院選挙の応援演説に現れた、鶴飼茂議員が後ろから撃たれた。一発目は外れて、その直後に撃たれた二発目が着弾。病院に搬送されたが、そのまま死亡した。撃ったのは無職の尾上雄一。その時に使用されたのは、尾上が自作した拳銃だった。」

3 「あの事件起こった時、テロだって思わなかった？」

空き巣 「……まあ、多少。」

1 「あの事件は尾上が、自分の母親が入信していた宗教団体を恨んで、その関係者を襲ったものだった。だから政治的な意味はない。でもそうやって、あの事件をただの一つの殺人事件にしてはいけない。風化させてはいけない。あの事件をテロにする必要がある。日本を変えていくために。」

空き巣 「……すみません、ちよつと何を言ってるんですか？」

- 1 「あなたは、日本に生きていて何も感じませんか？」
- 空き巣 「……感じませんけど。」
- 1 「本当に？ 本当に何も思わないですか？」
- 空き巣 「そりゃちよつとはありますけど。でも言ってもどうにも  
なんないでしょ。政治の事とかよくわかんないし。」
- 1 「それでいいと、本当に思ってるんですか？」
- 空き巣 「余裕ないですよ。自分が明日生きてく事で精いっぱい。」
- 1 「……だから何もしない？」
- 空き巣 「だって、なんもできないでしょ。」
- 1, 空き巣の胸倉を掴む。
- 1 「そうやって何もしようとしないう人間ばかりだから日本は  
変わらないんだ！」
- 2 「（1を空き巣から引きはがそうとしながら）姉ちゃん！」
- 1 「行動をおこさなくちゃいけないんだ！ 一人一人、自分に  
何ができるか考えなくちゃいけない！」
- 2 「わかっている、わかっているから！」
- 1 「政治に関わる人にわからせなくちゃいけない！ 何度でも  
銃を持った人間が現れる！ そう思わせなくちゃいけない  
い！ 責任と、覚悟が必要だって、他人の人生を壊せる力  
を持つてる人間に……！」
- 2 「大丈夫！ 大丈夫だから！ 落ち着いて。大丈夫。ちゃん  
とわかっているから。」
- 2, 1を無理やり落ち着かせる。
- 空き巣 「……なんなんだよ、本当。意味わかんねえよ！」
- 3 「あの二人の家、親が宗教にはまってめっちゃくちやになっ  
たんだって。」
- 空き巣 「えっ？」
- 3 「似てるんだって、犯人の家庭環境と。事件見た時に、あ  
れをやったのは自分かもしれないって思ったんだって。」
- 空き巣 「……。」
- 1 「……事件の直後は、政治と宗教の繋がりに関して注目が  
集まったけど、結局は一時的なもので、政教分離はなされ  
なかった。それ以外でも、国民の声で具体的に政治が動い  
たことはない。この国では声をあげても政治には届かない。

だから！暴力に訴えてでも変えようとする人間がいるってわからせなくちゃいけない！」

問。

空き巣「……声が届かないっていうのは、なんかわかる気がします。」

1 「……。」

空き巣「街歩いてて、デモ行進みたいのとか見かけるけど。それが何にもならないんじゃないかなっていう風には感じ  
てて。」

1 「……。」

空き巣「なんだろ……どんなに声出しても、どこにもつながって  
ない感じ。それは少し、わかる気がします。」

1 「どこにもつながってなかったら、何もしなくていいの？」

空き巣「でも何を、誰にもとめたらいいのか、わかんないじゃん。」

1 「だから戦う相手を決めなくちゃいけない。自分の中で。」

空き巣「……。」

1 「……与党の幹部クラスの人間を無差別に攻撃する。政治  
に関わる人間全員へのメッセージとして。」

問。

2 「あのさ……。」

1 「何？」

2 「明日は……やめておかない？」

1 「なんで!？」

2 「違う違うよ。中止しようって言ってるんじゃない。ただ、  
明日はいったんやめておいた方がいいんじゃないかと思っ  
て。」

1 「……なんでそんな事言うの？」

2 「トラブルがあった。計画の直前に知らない人はいつてき  
て、冷静じゃなくなってる。もっとと良くない事おこるかも  
しれない。日を改めた方がいいんじゃないかって……。」

1 「ダメだよ。」

2 「でも……。」

1 「私は落ち着いてる。先延ばしになんかできない。計画通  
りに、やる。」

2 「うん、そうでね。でも……。」

1 「大丈夫。お姉ちゃん大丈夫だから。うん……ちよつと外の空気吸ってくるね。」

1, 出て行く。

空き巢「……あなたのお姉さん、頭おかしくなってんじゃないの？」

2 「……そうかもしれないですね。だとしたら、それは俺のせいだから。」

空き巢「……。」

2 「姉ちゃんはずっと俺のために生きてくれてたから。大丈夫。お姉ちゃんが守ってあげるからってずっと……だから、俺だけは姉ちゃんの味方でいるってきめてるんです。例えば姉ちゃんのやる事が世界中から非難されたとしても。俺だけは。」

空き巢「……。」

2 「(3に) すいません……姉の様子見てきます。」

2, 出ていく。

3 「父親が事故で亡くなって。母親宗教にはまって。有り金全部献金して、そのうち借金作って行方不明。姉は弟のために学校辞めて働き始めて。でも、下の子の学費と生活費と稼ぐの何て簡単じゃないからどこに行きつくかは、まあ、わかるでしょう。」

空き巢「……まあ。」

3 「無理がたたって抜け殻みたいになってって。そんな時に尾上の事件見て、ああこれだって、思ったんだって。犯人と自分重ねて。はたから見たら、宗教にはまった母親と全く同じ。何かにすがらないと自分保てなくなってるの。」

空き巢「……。」

3 「バカだよ。自分でどうにもできなかつたらそれこそ国に頼ればよかったのに。日本くらい、救済してくれる仕組みが出来てる国もなかなかないよ。知らないだけ、わかってないだけで。それで世の中恨んでもどうしようもないでしょ。」

空き巢「何でそんな話俺にするんだよ……。」

3 「さあ、何でしょうね？」

空き巢「じゃあ、あなたはなんなわけ？」

- 3 「二人のスポンサー兼アドバイザーかな。ここ使わせてあげてんのも私だし。」
- 空き巢 「……弁護士なんだ。」
- 3 「弁護士良いよー金稼げるし。法律に詳しいと身の守り方わかるし。みんな弁護士になればいいのに。」
- 空き巢 「なれねえよ。」
- 3 「私はなれたけどね。」
- 空き巢 「そんな人が何でこんな事やってんの？ あんなの、あんな奴らで、成功すると思ってるの？」
- 3 「どうだろうね。成功したらいいなくらいに思ってるけど。」
- 空き巢 「なんだそりゃ。」
- 3 「どう思う？ もう一回政治家が撃たれたら、日本にテロの時代が来ると思う？」
- 空き巢 「……わかんねえよ、そんなの。」
- 3 「考えろよ、少しは。」
- 空き巢 「……。」
- 3 「本当に嫌いだよ。お前みたいに何にも考えないやつ。いざ分の目の前の問題になるまで、関係ないって思いこんで生きてる奴。」
- 1・2 戻ってくる。
- 3 「お帰り。さっ、こいつどうするか決めよっか。」
- 2 「……逃がしていいんじゃないですか？ しやべらないって言ってるし。」
- 1 「計画の前に、不安要素は少しでも減らしておきたい。」
- 3 「じゃあもう一回口ふさいで終わるまでここにいてもらうかな。」
- 空き巢 「あの！」
- 3 「何？」
- 空き巢 「手伝わせてもらえないですか。」
- 2 「えっ？」
- 空き巢 「何かやれることあったら、手伝わせてもらえないですか。」
- 3 「本気で言ってるの？」
- 空き巢 「やれることあるなら。協力したい。」
- 3 「ほぼ確実に捕まるけど。」

空き巣 「別に俺、やりたい事とかないし。捕まって迷惑かける人とかいないし。」

3 「寂しいね。」

2 「……どうする？」

1 「本当に、協力してくれるの？」

空き巣 「うん。」

1 「どうして？」

空き巣 「いや……政治の事とか正直よくわかんないし、意義とか、全然理解できてないんだけど。このまま関係ないって言うていい事なのかも、わかんなくて。」

1 「……。」

空き巣 「なんかしなきゃとは、思ってる。」

1 「……わかった。協力に感謝する。ありがとう。」

1, 空きを縛っていたロープをほどく。2, 1を手伝いロープをほどく。

3 「(1に)本当にいいの？」

1 「私たちの考えを聞いて協力しようと言ってくれた。それが、嬉しい。」

3 「足引っ張られるかもよ。」

1 「大丈夫。何もさせないから。」

3 「どういう事？」

空き巣 「で、具体的には何すればいいんすか？」

1 「計画を説明する。」

3 「まあシンプルだけど。街頭演説に出てきた奴を後ろから撃つ。」

空き巣 「後ろから……。」

1 「事件を思い起こさせるために、状況は可能な限り再現したい。」

空き巣 「わかった。」

1 「自作した銃の射程は長くない。外れる恐れがあるから可能な限り近づきたい。現に尾上は、一発目を外してる。」

3 「向こうもバカじゃないから。不審な人間が近づけばすぐ取り押さえられるかもしれない。それをさせないように壁役になるのが他の人の役目。」

空き巣 「壁……。」

3 「実行犯が止められそうになったら割って入って体で止める。」

空き巣 「弾は？ 何発あんの？」

1 「二発。必要最小限しかない。だから絶対に外せない。」  
空き巣 「……もし外したら？」

1 「外さないために確実なところまで近づく必要がある。」

3 「だから壁役も重要。」

空き巣 「俺は、それをやればいい？」

1 「……あなたは何もしなくていい。ただ近くで見ていて。」

空き巣 「はっ？」

3 「どういう事？」

1 「実行犯は確実に捕まる。他の二人も逃げられるは分からない。私たちが捕まった時に、その意思を繋いでほしい。」

空き巣 「見てる、だけ……。」

1 「いきなり全部信じて背中では預けられない。だから、気持ちを、託させて欲しい。私たちのやる事が誰かに繋がっている、そう思えたら、怖くない。」

空き巣 「……責任重大だ。」

2 「あの。」

3 「どうした？」

2 「今更なんだけど……撃つ役を俺にやらせて欲しい。」

1 「……どうして!？」

2 「こういうのやっぱ、男の仕事でしょ。」

1 「男とか女とか関係ない。戦うべき時に。」

3 「体力面考慮するなら、むしろ壁役の方が男が適任ってなつたと思うけど。」

1 「これは私がやりたいって言って始めた事だから。私がいやらなくちゃいけない。」

2 「……撃った人間が一番罪が重くなる。」

1 「わかってる。覚悟してる。この先の人生なんていらない。」

2 「そうやって、いっつも自分の事後回しにして、俺のためになってしてくれた。なのに俺、なんにも返せてない。」

1 「そんな事ない。」

2 「一回くらい、姉ちゃんのためになんかしたいんだよ。」  
1 「一緒にいてくれた。それで充分だよ。」  
2 「俺がいたせいで、姉ちゃんどんどん追い詰められていった。だから今度は俺が……。」  
1 「いたせいじゃないよ。いてくれたからだよ。一緒にいてくれたから頑張れた。お母さんいなくなった時も、一人じゃ耐えられなかった。」  
2 「でも……。」  
1 「男とか女は関係ないけど……お姉ちゃんだから。下の子を守ってあげないと。」  
2 「いつも……そう言って……。」  
1 「大丈夫。ありがとう。」  
2 1、2が持っている銃を握る。2、抵抗せずにその銃を1に渡す。  
1 「私がやるから。」  
2、何も言えずうつむいている。その時、空き巣が1に飛び掛かり、銃を奪って1を突き飛ばす。  
3 「何やって……！」  
空き巣、3に銃口を向ける。  
1 「お前！」  
1、起き上がり空き巣に近づこうとする。空き巣、銃を1に向ける。それでもなお1は近づこうとするが、2が1を後ろから抑え込んで止める。  
1 「どういうつもり？」  
空き巣 「ごめん、本当ごめん！ 考えて、考えたんだけど、でもなんか、やって欲しくないな……って思ったから。」  
1 「何言って……！」  
空き巣 「(1の言葉を遮り)考えろっていうから考えたんだよ！ これをどう受け止めて、どう繋いでいけばいいかとか。でもなんか、わかんなくて。違う気がして。だって、隣に誰かいてくれて、その人の事だけ考えてちゃ駄目なのかなって。そういう事だけ考えて生きてんのってダメなのかなって。」  
1 「そうやって個人の事だけ考えているから何も変わらな  
い！」

空き巢 「個人じゃなくて、隣にいる人の事も考えて、その人が幸せかなとかをみんなが考えたら、それでちよつと良くなつたりしないかな？」

1 「そんな事……。」

空き巢 「(1)の言葉を遮り)なんないか。なんないよな。ごめん、わかんなくて。だって俺、友達も家族もいなかったから。」

空き巢、銃口を天井に向ける。

1 「やめろ！」

空き巢、天井に向けて引き金を引く。銃声が2発。

### ○ 取調室

取調室の椅子に空き巢が座らされている。

空き巢 「……出来心だったんです。金に困ってて。バイト首になって、学歴もねえから全然就職も決まなくて、なんかもう人生詰んでんじゃないかって気持ちになって、それで、もうなんかどうでもよくなって。盗みに入ったら人がいて、騒がれて。それで通報されちゃったみたいで。本当にすいませんでした。」

空き巢、頭を下げる。

### ○ 弁護士事務所

1・2・3 がいる。1は壊れてしまった銃を持って  
呆然としている。2は1を心配そうに見ている。

3 「やられたね。計画めっちゃくちやだ。銃も壊れちゃったし。自作だとかっぱりもろいね。」

1 「……。」

3 「どうする？ 作るそこからもう一回やる？」

1 「……。」

2 「姉ちゃん？」

間。

3 「……あの事件が起こった後、私ずっとムカついてたんだよね。」

「えっ？」

3 2 「法律とか政治に関わってる人の中には、世の中良くした  
いって思ってる人は当たり前にいるんだよ。そういう人た  
ちはずっと、今の世の中を変える方法を考えてる。でも結  
局、世間が動くのは何かショッキングな事件になった時だ  
けなんだよ。そうなってようやく、今まで関心のなかった  
奴らが、さも自分事のように声をあげる。決められたルー  
ルの中で、真っ当に努力してきた人間を、バカにされてる  
ような気分だった。」

「……。」

3 1 「だったらさ、私ももうそういうやり方でやってやるよっ  
て。テロでも何でも起こしてさ、派手な暴力に訴えたら世  
の中動くんだって見せつけて、後はみんな好きにすればい  
いって、そう思ってた。」

「……。」

3 1 「でもちよつと、違う事も考えてたのかも。」

「……。」

3 1 「テロとかじゃないと世の中変わんないって、そんなのい  
くらなんでも悲しいじゃんって、そう思って欲しいとかも、  
ちよつと、考えてたかも。」

「……。」

3 1 「どうする？ 続ける？」

長い沈黙。1が顔をあげて何か言いかける。

終わり

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件とは一  
切関係ありません。